

きのかわ

—人と水の物語—

はじめに

水源林で育はぐまれる水。私たちの先祖は、自然からの恵みであるその水を必要だけ確保できるようにと、たくさんの水路やため池などを造ってきました。農業の形は昔とはすっかり変わってしまいましたが、この紀の川市にはそれらの遺産いさんがたくさん残されており、そのうちの多くは今でも現役げんえきで利用されています。

私たちは、紀の川市の農業を支える水源林にはどんな役割があるのか、また、身近にある農業用施設にどんな歴史があるのかを知り、これらの自然や先人せんじんからの贈り物を、大切に守り続けていくことが必要です。

この副読本では、紀の川市に関わる水源林や農業用施設をめぐる様々さまさまな物語を紹介しています。この副読本によって、生徒の皆さんが、豊かな歴史・文化を育んできた紀の川市の農業に、少しでも関心を持っていただけたら幸いです。

目次

一 水源林の役割

- 1 森の役割と水源林 2
- 2 紀の川市の水源林 4
- 3 水源林と用水路 6

二 人の物語

- 1 治水の天才 大畑才藏 8
- 2 医聖 華岡青洲 10

三 水の物語

- 1 小田井用水 12
- 2 龍之渡井 14
- 3 藤崎井用水 16
- 4 紀の川用水 18
- 5 川のはん濫を防ぐ 20
- 6 安楽川井用水 22

四 所在地マップ

- 7 ホリキリ 24
- 8 海神池と春日池 26
- 9 桜池 28
- 10 魚谷池と中後池 30
- 11 井上本荘ため池群 32
- 12 トンネル池 34
- 13 平池 36
- 14 山田ダム 38
- 15 元地区の棚田跡 40
- 16 本川谷沿いの棚田 42

五年表

- 参考資料 48



一 水源林の役割

1 森の役割と水源林

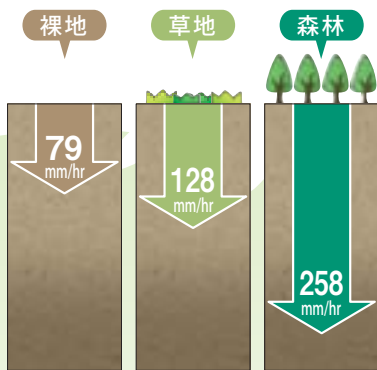
初夏の若葉、秋の紅葉など、季節ごとに様々な表情を見せ、私たちの目を楽しませてくれる森。しかし森の役割はそれだけではありません。

地球温暖化防止や土砂災害防止などのほか、森は多くの機能を持ちますが、とくに重要なのが、水を地中に蓄える「水源かん養機能」と呼ばれる機能です。

雨が降ると、水は地面にしみ込みます。地面が水を吸い込み蓄える能力のことを、浸透

能といえます。森の土壌はこの浸透能が草地の約二倍、植物の生えていない土地（裸地）に比べると約三倍と高いため（※平成一九年版森林・林業白書）、多

くの水を吸収して蓄え、ゆっくりと川などに送り出すことができます。この作用により、大雨の際には川の増水や



浸透能





鞆淵中学校の間伐体験（平成20年度）

はん濫を抑え、雨の少ない時期には水が干上がるのを防ぐなど、川に流れ込む水の量を調整することができず。また何層にも重なった土や砂の地層に水が浸み込むことで、不純物が取り除かれるとともに、森の土に含まれる豊富なミネラル分が水に溶け出すため、魚などの生き物が育ちやすい、きれいな水が育まれます。

この水源かん養機能を持った森林のことを、水源林（または水源かん養林）といいます。

水源林に降った雨は、地中に蓄えられ、徐々に溪流に流れ出し、川や水路などを通じ

て私たちの暮らす地域にもたらされ、農業用水や生活用水として利用されています。

しかし、水源林などの森の機能が十分に発揮されるためには、森の適切な管理が必要です。森が荒れると、地中に留まらず流れ出る水によって川が増水したり、土が緩んで土砂崩れが起こりやすくなったりします。そうならないために、密集した木のある程度切り倒して適度なすき間を作る間伐という作業などで、地面まで太陽の日差しを届かせるような手入れを行う必要があります。健康な森は、明るく、地面が下草や落ち葉で覆われていて、木の根がしっかりと土を抱え、水を蓄えることができるのです。

将来にわたって、私たちがこのような自然の恵みを受けるためには、これからも水源林をきちんと守っていく必要があります。

2 紀の川市の水源林

紀の川市は、西日本一の「果物王国」です。

なかでも桃やはっさく、いちじくなどは全国でも一、二を争うほどの生産量を誇ります。このような果樹栽培をはじめとする農業を営む上で欠かせないのが農業用水であり、その農



紀の川市の水源林（中畑地区）

業用水の生まれるところが水源林です。

紀の川市の農業を支えている水源林は、市内および近隣の山々、紀の川上流域、十津川流域などに分散しています。そこで降った雨が紀の川などの河川に流れ込み、用水路やため池へと取り入れられ、この紀の川市で利用されているのです。

紀の川市の森は、現在、財産区（市が所有する山林などの財産を管理する組織）などにより管理されていますが、昔はこんな出来事がありました。紀の川市の旧那賀町と旧粉河町との境に名手川という川が流れています。今から七〇〇年ほど前、川の東岸の名手荘（現在の野上・馬宿から名手市場にかけての地域）



と西岸の丹生屋村（現在の丹生谷・下丹生谷にかけての地域）との間で、農業や生活のための水の奪い合いが起りました。一方が川の水を田畑に引くための堰を設置すると、他方がこれを破壊する、また名手川上流にある椎尾山に麦畑を拓けば、相手はその麦を強引に刈り取るなどの争いが繰り返されていたのです。

とくにこの椎尾山については、この山を、耕作したり収穫したりすることは、その山の領有権を主張することと同じ意味がありました。これは、椎尾山が名手川の水源地であ



名手川合流付近の椎尾山

り、山の領有権が水の領有権につながっていたためです。この争いは和解に至るまで、鎌倉時代から室町末期までのおよそ二〇〇年以上もの歳月を費やしましたが、水と山が昔から深い関係にあったことを示している出来事だといえます。

そのほか、日本有数の多雨地帯である奈良県吉野郡の大台ヶ原もまた、紀の川市の水源地で、大台ヶ原から流れる水が紀の川の源流となっています。

このように、市内の水源林だけではなく、一見遠く離れた場所にある山や森でも、私たちにとって非常に重要な恵みをもたらしてくれています。これらの森で育まれた水のおかげで、紀の川市は豊かな農産物に恵まれているのです。

3 水源林と用水路

用水路の水源は川やため池であり、さらにその源には水源林となる山があります。しかし、歴史をひもとくと、水源林と用水路の関係にはもう少し違った側面もありました。

今から七〇〇〜八〇〇年前の中世という時代、今の紀の川市にあたる地域には、高野山や都の貴族たちが領有する「荘園」と呼ばれる領地があちこちに広がっていました。それらの荘園は、それぞれの土地の地名をとって名手荘とか、粉河荘などと呼ばれていました。

そうした荘園のひとつで、紀の川の北岸にあった田中荘（現在の東国分から東大井にかけての地域）は、平野部に位置していたためにまとまった山林がなく、古くから水田の肥



百合山山頂の最初カ峰

料とする落ち葉や生活のための燃料とする薪などの確保に苦労してきました。そうした問題を解決するために、田中荘の人々は、平安時代の頃には紀の川の南側に位置する荒川（旧桃山町地域）内にある最初カ峰周辺に強引に入り込んで柴草を刈るなどしたため、

荒川荘との間で激しい争いとなっていきました。荒川荘にとっては、この山は重要な水源林であったので、争いとなるのは当然のことですが、





百合山から見た打田地域（中世の田中荘にあたる地域）

田中荘にもせっぱつまった事情というものがあつたのでしょうか。

今から四〇〇年ほど前の安土桃山時代の終わり頃、木食応其もくじきおうごという高野山の僧侶そうりよが、この問題の解決に乗り出しました。応其は、紀の川の南岸に少しだけせり出していた田中荘の土地に着目し、この土地に荒川荘の用水路を造らせる代わりに、最初カ峰周辺の山林で田中荘の人々が薪をとったりすることを認めさせたのです。この用水路は、これ以前から利用されていながらも一部荒廃こうはいしていた現在の安楽川あらかわい井用水の原型と考えられ、この時、応其によって復興ふっこうが図られています。荒川荘にとってみれば、水源林の一部を提供する代わりに用水路を得たことになり、水源林と用水路の深い関係がここからもうかがえます。



三人の物語

1 治水の天才 大畑才蔵

大畑才蔵おおはたさいぞうは、一六四二年、現在の橋本市学か文路むろに生まれました。才蔵は二三歳の時、父の後を継いで庄屋しょうや（有力な百姓ひょうしんが務める村の役人）となりましたが、それ以前から測量そくりようの仕事などにたずさわっており、庄屋の仕事のかたわらで、一時、和歌山城下で紀州藩はんの仕事をしたこともありました。そしてその時の熱心な仕事ぶりが藩の役人たちの間で評判となり、才蔵が五五歳となった一六九六年、藩の下級役人に取り立てられました。

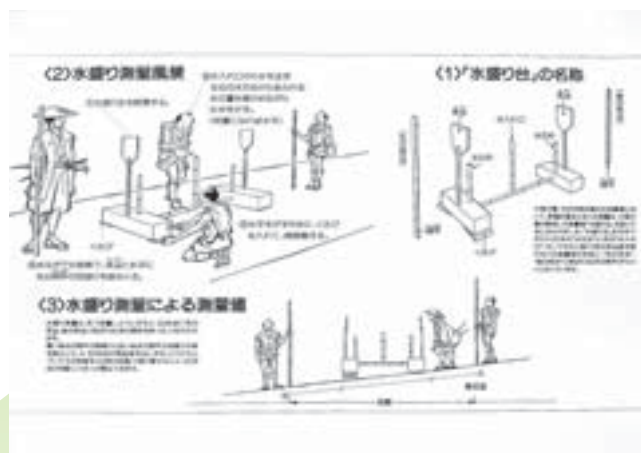
才蔵の最大の業績は、紀の川から川の水を引いて、藤崎井・小田井という農業用水路を造り、それまで畑や荒地だったところに水田ひらを拓いて、米の収穫量を大きく増大させたことです。これらの用水路は、改修を重ねながら現在でも使われており、紀の川市をはじめとする周辺の農家の大きな支えとなっています。才蔵による工事の特徴は、長い工事区間をいくつかのグループに分け、同時に工事を進めるといったものでした。そのため、工



事区間ごとに精密な測量をおこなって水が流れるようにしなければならず、才蔵自ら発明した測量道具（水盛台）がとても役に立ちました。とくに小田井は、三〇〇〇分の一から五〇〇〇分の一というとてもゆるやかな勾配を流れており、才蔵の測量技術がかなり高かったことがうかがえます。このような高い技術を駆使し、効率的に工事を進めた結果、才蔵による用水路工事はいつもとても早く進み、藩の役人たちを驚かせました。

才蔵は、自らの経験をふまえて多くの書物を書き残しています。その内容はとても分かりやすく、才蔵自ら「工事に手品はいらない」と記しているように、小難しい理屈や人目をあざむくようなことはひとつも書かれていません。また、才蔵は常に百姓や工事にあたる人夫のことを気づかい、疲れた人夫に湯茶を

用意したり、百姓にメリットのない新田開発は決しておこないませんでした。一方で、才蔵は二人の子どものために新しく水田を開墾したり、妻のためにも財産を残すなど、とても家族思いの一面もありました。



水盛台の様子 (小田井土地改良区所蔵)

2 医聖 華岡青洲

華岡青洲は、一七六〇年、現在の紀の川市西野山で生まれました。代々医業を営む家に生まれた青洲は、医者になることを宿命づけられ、父から医術を教え込まれました。二三歳から二六歳までは、京都で実証主義の医学者である吉益南涯と、オランダ流医学者である大和見立という二人に学びました。この京都で学んでいた時代に、中国・三国時代の名医・華佗の麻酔薬手術を知り、あこがれを持つたことが、その後の青洲の麻酔薬研究を志すきっかけとなったといわれています。

青洲は、二六歳で故郷に帰り、町医者として病人の診察をするかたわら、ひとり野山を歩き回って薬草を探し、内外の書物も



集め、麻酔薬の研究に没頭しました。母・於繼と妻・加恵の献身的な協力のもと、ついに「通仙散」という全身麻酔薬を完成させます。この通仙散を用いた乳がん摘出手術に成功したのは、一八〇四年、青洲が四五歳の時でした。

華岡青洲 (1760 ~ 1835)
(個人蔵)





垣内池と青洲の歌碑

た。アメリカでモートンたちによるエーテルガス麻酔薬手術がおこなわれたのはその四〇年後ですので、世界ではじめての偉大な業績といえます。

青洲は、手術の成功後、「春林軒」という医学校を創設して、全国各地の人材の育成にも務めました。当時の紀州藩主の「侍医になる

ように」という要請にも応じず、一八三五年、七六歳で没するまで、西野山を離れることなく医業と後進の育成を続けました。これは青洲が「庶民大衆の病を治す」という使命感を常に持っていたからと考えられます。

二〇〇〇年に完成した紀の川市の「青洲の里」では、これら華岡青洲の業績が分かりやすい解説付きで展示されていますので、ぜひ、見学してください。

ところで、西野山の県道沿いにある垣内池のほとりに「水みたば心をこめて田うへせよ 池の昔を思いわすれず」という青洲の歌碑が建っています。青洲はこの付近の農民が干ばつなど水不足で苦しむ状況を見かねて、私財を投げ打ってこの池を造りました。青洲が医業において大きな足跡を残す一方、地域振興にも深い思い入れを持っていたことが偲ばれます。



三 水の物語

1 小田井用水

和泉山脈の南側と紀の川との間に続く台地上の地域は、古くから水不足に悩まされてきました。このため、先人たちはため池などを造り農業用水に利用してきましたが、文化の発達や人口の増加により、これまでの小規模なかんがいでは充たすことができず、大規模なかんがい事業が必要となってきました。

一七〇七年、紀州藩の五代藩主で、後に將軍となった徳川吉宗は、大畑才蔵に命じて豊かな水量を誇る紀の川を水源とする小田井用

水の築造に着手しました。

小田井用水は橋本市高野口町小田にある「小田頭首工」(標高六七メートル)から紀の川の水を引き、岩出市(標高四五メートル)までの約三二キロメートルにおよぶ県下最大の用水路で、現在では五九六ヘクタールの水田を潤しています。

才蔵は数理知識を駆使して水利土木の技術を研究し、この難工事にとりかかりました。なかでも、用水路が和泉山脈から流れ出る小





木積川渡井

河川と交差するところでは、掛渡井（支柱なしの水路橋）やサイホン（川の底をくぐらせた水路）などの高い技術が要求される難工事でした。紀の川市の西境を南北に流れる木積川を越えるところでも、木造の渡井がかけられました。木積川の渡井

は、一九一四年にはレンガ造りのアーチ橋としてつけ替えられ、現在、国の登録有形文化財となっています。

一九一五年には、農民のために献身した才蔵の遺徳を讃える「頌功之碑」が粉河寺境内に建立されています。



大畑才蔵の頌功之碑

小田井用水は現在も紀の川の北部流域の人々にとっては「命の水」として、地域の農業振興に効果を発揮しているだけでなく、素晴らしい歴史や美しい景観を形成し、地域に貢献しています。

紀の川市内には、多くの農業用水路が張り巡らされ、そのおかげで紀の川市は、県下トップクラスの農業生産をあげています。

2 龍之渡井

山地の多い和歌山県において、紀の川流域は河口付近を中心として最大の平野部となり、貴重な穀倉地帯として存在し続けてきました。しかし、稲作には十分な水が必要となります。その水の確保のために中世以来様々な努力が続けられ、数多くのため池が造られてきました。これらのため池は、今も立派にその役割を果たし続けているものが数多く残されています。

やがて、江戸時代になると、本格的で大規模な用水路工事が次々とおこなわれるようになりました。紀の川流域の用水路工事になくてはならなかった人物が大畑才蔵おおはたさいぞうです。才蔵が手がけた用水路の中でも小田井用水は県下



龍之渡井



最大のものとして知られています。

小田井用水は、橋本市高野口町小田から紀の川の水を引き、橋本市高野口町・かつらぎ町と紀の川市の旧那賀町・旧粉河町・旧打田町および岩出市一帯の五九六ヘクタールの田畑をかんがいしています。宝永年間（一七〇四〜一七一〇年）に藩主徳川吉宗の命を受け、工事が始められました。

才蔵がこの工事を進めるにあたって、数多い紀の川の支流に対し、用水をどうやって横断させるかが大きな課題となりました。支流の



小田頭首工（橋本市高野口町）

河川の下を掘り抜いて通す方法がありましたが、これは河川の幅がせまくて傾斜の急なところでは有効な方法でした。ところが、かつらぎ町と旧那賀町の境にあたる穴伏川は川幅が一メートル余りもあり、地形的にもこのような方法はできませんでした。

そこで、穴伏川の両岸の岩盤を掘りくぼめ、途中に一本の支柱も使わずに川の上を通す木樋がかけられました。このような方法は一般に掛渡井と呼ばれますが、この地のものは「龍之渡井」という固有名詞で呼ばれました。

現在の龍之渡井は大正時代に架け替えられました。国登録文化財にも指定され、小田井用水の水道橋として今でも活躍しています。

3 藤崎井用水

紀の川市は、はっさく・いちじく・柿などの生産が盛んで「果物大国」といわれていますが、この農業のためにはなくてはならないのが水です。その水の確保のために紀の川市には七〇〇を超えるため池と、数多くの農業用水路が網の目のように張り巡らされています。

その中でも、

紀の川用水・小田井用水・藤崎井用水・荒見井用水・安楽川井用水・貴志川用水などは基幹水路として今も多



藤崎頭首工

くの水を運んでいます。

紀の川市に数多く造られた用水路の中でも、県内最大の小田井用水が大変有名ですが、藤崎井用水も小田井同様、徳川吉宗の命を受けた大畑才蔵によって造られた用水路として知られ、一六九六年に着工し四年後に完成しました。

藤崎井用水は、紀の川市の藤崎弁天の西で紀の川から水を取り、紀の川市(旧粉河町・旧打田町)・岩出市を経て和歌山市山口の上黒谷までの延長約二キロメートル、一帯の八〇〇ヘクタール近い土地をかんがいしています。

この用水が造られる前は、このあたりの土



地にはかんがいの施設がなく、畑作が大半で水田の経営は不可能でした。しかし、用水路の完成によって、沿岸の畑地は次々と水田に転換されました。また、毎年のように干ばつに悩まされていた水田の経営も安定し、紀の川沿いの農民の生活が豊かになりました。

しかし、紀の川は多雨地帯である大台ヶ原を水源地に持っているため、毎年のように大洪水が発生し、そのつど水路は損害を受けました。しかも、水害の発生時期が農業用水の必要な時期と重なる七月〜九月であるため、破損箇所はそんかしょの補修ほしゅうには想像以上の苦勞がありました。一九五三年の水害の後、旧藤崎堰せきより一〇〇メートル下流に近代的な頭首工とうしゅこうが完成し、藤崎井はもとより、紀の川南岸の荒見井・安楽川井用水もすべてこの取水口より取水されるようになりました。



藤崎弁天

4 紀の川用水

紀の川沿岸北部の地域では、古くから水田が発達していました。それらは、平坦水田地帯と和泉山脈山麓にまで開けた段丘水田地帯となっています。そして段丘水田地帯の多くは、紀の川からのかんがい用水にたよらない水田で、溪流やため池群によってかんがいされていました。しかし、降水量の少ない年にはため池も満水せず、水田はたびたび干ばつ被害を受けていました。

また、水田より高い傾斜地には、柿・みかんなどの果樹園が東西につらなっています。これらの果樹園には、一般にかんがい施設が少ないため、品質・収量が天候によって左右されて経営の安定しない状態が続いていました。

紀の川用水は、十津川・紀の川総合開発事業の一環として、一九六四年一月、国営紀の川用水事業として発足し、このようなため池・溪流によるかんがい水田の一部と、果樹園の一部のかんがい用水として造られるようになりまし。十津川（奈良県）に建設される猿谷ダムから、紀の川支流大和丹生川へ放流される水を水源として、奈良県五條市から和歌山県和歌山市北別所までを通る用水路として建設され、総事業費一一五億円をかけて、一九八四年に完成しました。

かんがい地区としては、紀の川に沿う上流橋本市から和歌山市にわたる水田や果樹畑を対象としています。用水路は標高九〇〇



紀の川用水の水源 猿谷ダム (奈良県五條市)

一〇〇メートルの段丘面を通っています。そのため、トンネル、サイホン（川の底をくぐらせた水路）、水路橋が約八〇パーセントを占めて、目

に見える水路は非常に少なくなっています。

この用水は、長い間農業用水に苦心してきた人々の、農業を安定しておこない、発展させたいという願いのもとに造られました。目に見える部分は少ないですが、山を越え、谷を越え、川を越えて、はるばる奈良県からやってきた水によって、和歌山県の水田・果樹園約一九〇〇ヘクタールが潤うるおされています。



紀の川用水チェックゲート
(紀の川用水の見られる市内で数少ないところ)



5 川のはん濫を防ぐ

今は、のどかな田園風景が広がる桃山。この風景の奥には、荒れる川に苦しみ、多くの犠牲に耐えながら暮らしてきた人々の様々な生き様が隠されています。紀の川は、大台ヶ原に源を発し、毎年夏にはん濫しました。紀の川・貴志川の合流点から竹房橋にかけての所は、いくつもの支流に分かれ、中州の島や芝地が多く点在するはん濫原でした。このような状況からこの地区は、「荒川」と呼ばれていました。

鎌倉時代には、源為時や吉中良継ら「悪党」と呼ばれる人々を中心に、所有権のはっきりしない中州の島や芝地を開墾して田畑に変えたり、島に市場を立てて、川を行き交う

物資輸送船を経営しました。そして、交易の利益を使って堤防の工事をしたり、「大井」と呼ばれる用水路を開削したりして大いに栄えました。しかし、所有権のない場所の開墾は、領地争いに巻きこまれ、高野山や鎌倉幕府にいらまれて減ぼされてしまいます。

その後、長い間、荒川は高野山の莊園でした。江戸時代に、紀州藩士の安藤忠兵衛は藩主の徳川頼宣から「この地新田となすべき地なり、開発すべし、開墾せば汝に賜うべし」と言われました。忠兵衛は段村の人々とともに苦心の末に堤防を築き、曲がって流れたり、いくつもの支流に分かれていた紀の川を、ひとつすじの直線に流すようにしました。そして

中州の島や芝地、支流跡に新田を開墾し、以前からあった用水を改修したり開削したりして、生産力を増やしました。

その後も長い年月をかけて工事がおこなわれ、現在のような立派な堤防が出来上がりました。

人々は、この堤防から眺める景色のすばらしさから、いつしか「花見堤」^{はなみづつみ}と呼ぶようになったそうです。また、この新田は今、「桃源郷」^{げんきやう}と呼ばれています。



百合山から見た桃山地区



桃源郷（紀の川市桃山町段新田地区付近）



6 安楽川井用水

紀の川市桃山町の東の端に「百合」といわれる所があります。江戸時代に書かれた『紀伊続風土記』によると、「新田の東端に湯入という出村あり、湯入は堰入なり、此地紀の川の水を高野山領荒川に漑く、その堰の入口なる



安楽川井用水

を以て名つく」と記されています。

安楽川井用水は、高野山の文書によると鎌倉時代頃には存在していました。この頃の紀の川は、中州の島や芝地があちこちにあり、それらを開墾するには、用水が不可欠なものでした。しかし、大水が出ると取水口は破壊され用水も多くの被害を被り、人々は、洪水のたびに再興、修復するのに多くの労力と費用を要しました。大洪水により壊滅的な被害を受けると放置されることもありました。

安土・桃山時代の一五九〇年、高野山の僧侶木食応其によって安楽川井用水は再興されました。その時に、田中荘から荒川荘の山に入って薪をとることと、田中荘にあった

用水の取水口や水路の借地料を相殺することになりました。

用水は、二つに分かれていました。元村・市場村を流れる安楽川井と段村・新田村を流れる段村井と区別して呼ばれていたのかもしれませんが。それからは、洪水のたびに用水路や取水口を再興し、稲穂がたわわに実る多くの水田が拓かれたことでしょう。

現在の安楽川井用水は、藤崎で取水する荒見井と、隧道と開渠の水路で結ばれています。長い年月と人々の苦勞の末に拓かれた土地は、肥沃で水はけも良く、水田よりも果樹栽培に適していました。

あら川の桃は、一七八二年段新田の村垣惣八が摂津国（今の大阪府）池田から桃の苗木を持ち帰り、紀の川流域に植えたのが始まりといわれています。



荒見井用水（現在は安楽川井用水と統合）

現在の桃は、一八九八年、百合の桃栽培農家の人々が摂津から新品種（中国から輸入された上海水蜜桃と天津水蜜桃）を持ち帰り、改良を重ねたものです。中国からはるるる旅をしてきた桃は、やっと「約束の地」に巡り会え、今では、「桃源郷」と呼ばれています。



7 ホリキリ

平安時代から鎌倉時代、鞍瀨地区は京都の石清水八幡宮が支配する領地でありました。

その頃、水田を開発するために、貴志川の支流である真国川から水を引く用水路を掘ろうとしていました。ところが、その途中には



ホリキリ

非常に硬い岩盤があったのです。水を引くためには、どうしてもそこを掘り抜かなければなりません。機械など何もない時代でしたから、大変な難工事です。それでも当時の人々は力を合わせて少しずつでも岩を削り続け、苦心の末にその岩盤を掘り抜きました。それによって豊かな水の恵みを得ることができるようになったのです。その場所は「ホリキリ」と呼ばれ、この時に掘られた用水路は現在も使用され、地元の水利組合によって管理され、水田を潤し続けています。

この「ホリキリ」の工事に関して、地元には次のような言い伝えが残っています。

「その硬い岩盤は靱瀧の北にそびえる飯盛山の神様の足の骨だったので、掘り抜いた途端に地中から激しく鮮血が吹き出しました。そのことで神様の怒りを買ったので、それ以後、靱瀧には力の強い男は生まれなくなりました。」

事実はともかく、人間が立ち塞がる大自然(神様)に打ち勝って、このような開発を成し遂げたのですから、将来、人間に対する仕返しがきつとあるにちがいない。その当時の人々が自然を恐れ敬う気持ちがよく表れているのではないのでしょうか。

科学技術の大きな進歩によって、人類は豊かで便利な生活が出来るようになりました。しかし、そのことと引き替えに、自然環境を破壊してきたために、人類や地球の未来が危



ホリキリから続く水路

機にさらされるようになってしまいました。近年になってようやく、環境問題に関心が持たれ、人々はこれに真剣に取り組もうとしています。この「ホリキリ」の伝承からは、すでに大昔の靱瀧に住んでいた人々が、人間の暮らしと自然の調和のあり方について考えていたことを示しています。



8 海神池と春日池

徳川家康とくがわいえやすが開いた江戸幕府は、きちんと年貢を納める納税者として百姓を大切に保護しました。そのため、百姓ひょうみくが没落ぼつらくしないよう法令を定めたり、村で共有する山林や用水などをしっかりと管理するよう厳しく言いつけました。

紀州の初代藩主はんしゅである徳川頼宣よりのぶも父家康の方針を引きつぎ、農業の開発には力を入れました。

それまでの農業用水は、谷川の水を堰せき止めるか、天然の池や沼の水を利用するのが一般的でしたが、一六四九年、頼宣の命めいによって築造された海神池うながみや春日池は、紀州藩直営はんの普請方しんかた（藩の土木工事を司る役所）が築造した

池で、粉河の桜池や海南の亀池と同様にそれにかかる費用も藩から出されました。

それらの池により、周辺の農民は米作りに多大な恩恵を得ることになりましたが、池の維持や管理には多くの苦勞がありました。

旧打田町北中にある海神池は、一六四九年、倉谷川と山田川を堰せき



春日池



海神池

止めて築造された池です。大洪水の時には和泉山脈からの土砂が流され、それが池底に堆積するなど、池の管理には多くの苦労がありました。

海神池の近くには海神社があります。祭神は豊玉彦命とよたまひこのみことで「海神」うみのかみと「龍神」りゅうのかみであり、水を支配する神として、江戸時代には藩命はんめいによって雨乞祈禱あまごいきとぐの神事もおこなわれていました。

旧打田町東三谷にある春日池は、正保・慶安の頃（一六四四〜五一年）、春日川と不動寺川を堰き止めて築造された池です。

明治時代には、何回かの洪水で堤防が決壊するとそのつど復旧工事がなされ、一九五一年のケイト台風では、春日池の堤防が大破され、多くの費用と人の力で復旧されています。



9 桜池



桜池

桜池は、紀の川流域にある大きなため池で、紀の川市の北志野（旧粉河町）にあります。紀の川北岸の平地は、紀の川平野と和泉山脈から紀の川へ注ぐ川の扇状地からなっています。

名手川・中津川・松井川などが紀の川に注ぎ、この付近の水田は、これらの川の各地に井堰を設けて取り水し、その水を池へ貯めてかんがいられていました。しかし、たびたび水不足で苦しめられ、水争いもしばしば起こりました。

そのため、一六五〇年に紀州藩主・徳川頼宣の命で、藩直営の工事として新しい池を築くことになりました。人夫として那賀郡の各村々と、周辺の伊都郡、和歌山市、海草郡あた

りからも百姓がかり出され、のべ人数四二万人に達しました。四二万人のうち約三〇万人の人手は堤防づくりにあてられました。

場所は、北志野村桜という地名です。そこを流れる松井川上流の志野谷の両岸のはしを堤で堰き止め、水を貯めようとする大工事でした。突貫工事により、わずか二年半で完成した池は、南北が約一キロメートル、堤の東西が二七〇メートル、高さ二三メートルの壮大なものでした。この桜池の水でかんがいする水田は粉河から岩出市岡田まで、三組三八か村の水田三二〇ヘクタールにおよびました。

その後、江戸中期に小田井・藤崎井用水が完成すると、それより南側の地域では、小田井・藤崎井用水によるかんがいとなったために、桜池掛かりの村は二六か村(旧粉河町、打田町)となり、かんがい面積は約半分となりま



徳川頼宣像 (1602 ~ 1671) (和歌山県立博物館蔵)

した。また、桜池自体、時がたつにつれて、泥や土で埋まりせばめられて、一七三三年には南北の長さは約三分の二の六〇〇メートルになっていきます。さらに、明治以降には急速に埋まりが進み、現在も土砂がどんどん入り込んでいます。しかし、現在もこの周辺の水田にとっては大切な水源となっています。



10 魚谷池と中後池

現在の紀の川市井田、JA紀の里農産物流通センターの近くに、魚谷池うおだちという大きなため池があります。緑の木々が生い茂る山と山の間を堰せき止めてダムを造り、ため池としたものです。ダムといっても、コンクリートで造られたものではなく、土を踏み固めながら何十メートルも盛って造られたもので、今ではしっかり根を生やした草木が生え、春には小さな花々も咲き乱れます。

この魚谷池は、今から七〇〇年以上も前、鎌倉時代の粉河の農民たちが、自分たちの力で築きあげたものであることがはっきりと分かる、全国的にも大変珍しいため池です。ため池は全国に無数ありますが、ばく大な労力

と費用を必要とする用水路と違って、ため池は古くなればなるほど、いつ誰が造ったものかということが分かりづらくなってきます。なかには、弘法大師が杖つえをついたところに池ができた、などという伝説に包まれたため池も多くあり、今に残されている確かな史料で、起源がはっきりと分かるため池というのは実は少ないのです。

しかも、魚谷池の近くには、同じく鎌倉時代に造られたことがはっきりと分かる中後池ちゆうごというため池もあり、いずれのため池も粉河の農民たちが造ったものだということが分かっています。その証拠しょうこに、魚谷池については、池に貯たくわめられた水を一滴も無駄にしない

よう、時間を区切って皆で大事に分け合って使っていたことを示す文書（ノート）が残されています。こうしたノートは、全国的にも他に例がない、大変珍しいもので、国の民俗文化財にも指定されています。

ため池は全国至るところにあり、どこにもある風景だと思って見過ごされがちです。紀の川市に残る魚谷池・中後池も、一見どこにでもありそうなため池にみえませんが、実はそこには、歴史に名前を残さなかったまったく無名の、そして無数の人たちの生きた証が埋め込まれています。どこにでもありそうなこの風景が、実はかけがえのない価値を持っているのです。



魚谷池



中後池

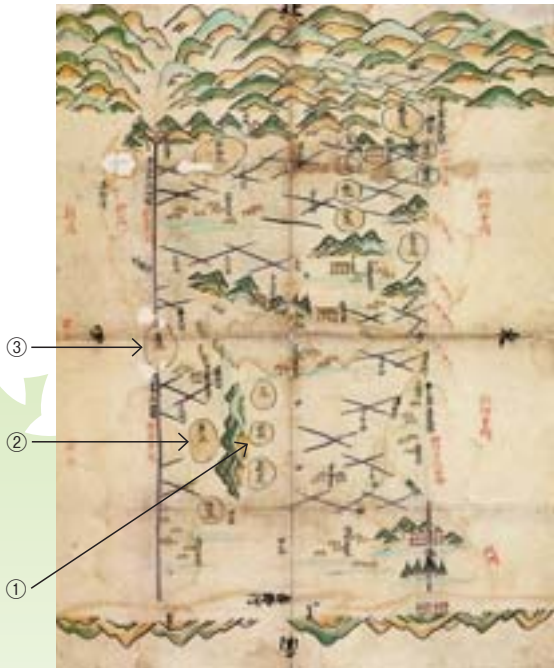


11 井上本莊ため池群

多くの恋の歌を歌ったことで有名な小野小町^{おののこまち}。その小町が住んでいたという家があった場所に、現在、随心院^{ずいしんいん}という寺が建っています。京都市山科区^{やましな}にあるこの随心院は、鎌倉時代から室町時代にかけて、紀の川市の長田地区周辺が井上本莊と呼ばれていた頃、その井上本莊を支配していた寺で、この随心院に、鎌倉時代の井上本莊、つまり現在の紀の川市長田地区の様子を描いた絵図が伝わっています。緑、青、黄色、赤などのカラフルな色を使って描かれた小さいサイズの絵図で、今から七〇〇年ほど前の鎌倉時代末期に描かれたものと考えられています。

この絵図には、全部で一五のため池が描か

れています。ため池の他にも、人々が住む家や神社、田畑、道、川、それに樹木や山並みなども色彩豊かに描き込まれていますが、全体を見渡してみた時、ため池の多さはとても際^{きわ}だっています。実は現在ではあまり目立ちま



紀伊国井上本莊絵図（随心院蔵）

せんが、長田地区の現地にも多くのため池が残されていて、この絵図に描かれた場所と同じ場所に、今もなおため池が残っていると、ころも少なくありません。このことは実は全国的にみても非常に珍しいことで、絵図が鎌倉時代に描かれたものであることがはっきりしていることから、現在長田地区に残っているこれらのため池も、今から七〇〇年前の鎌倉時代からこの地において使われてきたため池



現在も残る阿弥陀池（絵図中の①新池）



現在も残る黒津池（絵図中の②蔵人池）



現在も残る呂の池（絵図中の③道池）

りません。地元で暮らす私たちにとってはあまりにもありふれた風景ですが、実はそれほど「ありふれている」ものではなかったのです。大阪府南部から和歌山県北部にかけての和泉山脈の山麓地帯は、昔から雨の少ない地帯でした。これらのため池は、雨不足に悩む当時の人たちが、少ない雨を何とか貯め込んで、大事に使おうと必死で努力した痕跡ともいえます。

であることに、まずまちがいありません。しかも、これだけたくさん池が連なって残っている風景で、その起源がはっきりしている風景は、日本中探してもそう多いわけではあ



12 トンネル池

紀の川市桃山町調月・最上の山間部には多くのため池があります。そのひとつ、調月東部の増田池には、トンネル開削の苦難の歴史があります。一九一一年、調月村村長に就任した坂本文三郎は、上地区一帯の水問題に頭を痛めていました。標高一〇〇〇〜二〇〇〇メートルの起伏のある高地にある田は、それまでの畑作から水稲耕作に替わったため、「月夜でも稲が枯れる」と言われるほど水不



トンネル池

足になりました。村人の争いも増え、水問題はいつそう深刻になりました。坂本村長は、当時、調月村東部をかんがいていた増田池の水量を高める秘策として、愛宕山の東に広がる仏谷の谷水を堰き止めて池を造り、その池の水をトンネルによって増田池まで導くことを思い立ちました。この案は何度も話に出ましたが、資金難であきらめていました。村長は地主を説得して寄付を割り当てたり、大口出資者を募ったりしました。トンネルは一〇〇メートルほどの距離でしたが、まだ重機もなく、ろうせき掘りのベテランもいませんが、鉄のみと金槌程度の工具ではなかなか進みません。

その上岩盤はとても硬かったそうです。のみで開けた穴にダイナマイトや焰硝えんしょうを押し込んで点火し、爆破で砕いた岩を箱車で運び出す作業でした。また、池の堤防を築く工事やトンネル工事、トンネルから増田池に引く水路を造る工事等は、暗闇ちやうちんに提灯ともを灯して掘る方向や角度を目測したといわれています。

工事は長期化してお金も底をついたことから、坂本村長は、自らの田畑を売り払い、借金までしてこの事業の完成をめざしました。時にはお金の未払いや、借金の取り立てに日本刀を持って追いかけられながらも、一九一七年の末に池と水路が完成しました。水路に水がほとばしった時には坂本村長はじめ、人々の感激はいかばかりだったでしょう。これ以降、農民は水不足の悩みから解放されました。

トンネル池へと続く水路



13 平池

貴志川は、古墳などの埋蔵文化財が多く、地形が似ているところから「紀州の飛鳥」と呼ばれていますが、平池にも四つの古墳が点在します。

最も北にある一号墳は前方後円墳、池の中にある二号墳、南側の池の堤にある三号・四号墳は、いずれも円墳です。平池の古墳調査の際に二号墳から須恵器の壺と国府型ナイフ形石器が発見されています。このことから、古墳があったところに人造の池が造られたと考えられます。

平池は、周囲約二キロメートルある貴志川流域最大の用水池です。平均水深二メートルの浅い池で、広さの割には水量が少ないので

すが、その水は、貴志川中学校の西にある前田池につながり、前田池の水が貴志川の支流の丸田川に流れ、周辺をかんがいでいます。つまり、貴志川町内のいくつかのため池がお互い協力し合って成り立ってきたということ

です。また、上流から流れてくる水をいったん貯めることで、一気に下の方に流さないための調整池の働きがあり、大雨の時などは防災面での役割を果たしてきたのです。

このような大切なため池を守るために、かつては「池干し」がおこなわれてきました。「池干し」とは、ため池の水をいったん全部抜いて、池の底の泥を肥料として使用することで



平池

す。その時に、樋(池の水を抜くためのもの)や周辺の堤を補修したそうです。この池干しによって池の中の富栄養化を防ぎ、アオコの異常発生を抑えていたのです。

平池は、県下有数の野鳥の生息地でもあり、オオハクチョウが飛来して人々を驚かせています。また、オニバスなどの貴重な水生植物の生育地でもあります。現在は、遊歩道や広場が整備され、周辺住民の憩いの場所として、または、ウォーキングのコースとして活用されています。



前田池



14 山田ダム

山田ダムは、紀の川市貴志川町高尾のスポーツ公園の先にあるダムです。

紀の川流域は、夏季に降雨が集中する地域であり、夏季に雨が降らなかった場合、水不足に陥ることが多かったのです。そのため、紀の川流域でも貴志川流域でも、ため池が多く造られました。とくに、貴志川地域は、三方を山に囲まれた台地に耕地があり、干ばつの年には、水田は枯渇し、飲料水にも事欠くことが多かったのです。

徳川吉宗の時代、全国各地に井堰（用水路）が造られましたが、江戸時代末期に造られた諸井堰の水源として建設されたのが山田ダムです。



山田ダム

山田ダムは、一九五三年に国の十津川・紀の川総合開発事業の一環として着工され、一九五七年に完成しました。このダムの完成により、貴志川・桃山地区に配水され、干ばつに悩まされた地域も今では理想的な田園地帯になっています。



諸井頭首工

山田ダムは、ダム自体のコンクリートの重さを利用し水圧に耐えるしくみ（重力式コンクリートダム）となっており、山田川（野田原川）の水を堰き止めて造られ、県下で最も貯水量の多い農業用貯水池です。この水と、貴

志川・山田川合流地点近くの諸井堰（諸井頭首工）で取り入れられている水が、それぞれの水路を通じて貴志川地域を主に潤しています。

諸井堰（諸井頭首工）では、川の両岸に水路が設けられていて、西岸の水路で神戸・前田地区を、東岸の水路で井ノ口・岸小野・北地区をかんがっています。また、この合流地点の中州に蜚の飼育池が造られ多く人が見物に訪れています。

複雑に入り組んだ地形にできた人造湖は山田貯水池といい、湖を囲むように植えられた桜の名所として、ヘラブナやブラックバスの釣りスポットとして、さらに湖岸に二つのゴルフ場があり、四季を通じて多くの人を訪れています。

二〇〇五年より、ダム施設の改良工事がおこなわれています。



15 元地区の棚田跡

日本の原風景ともいえるべき「棚田」。傾斜地に並んだ棚状の田んぼの美しい風景は、私たちの心を癒してくれます。和歌山県にも棚田百選に選ばれた「あらぎ島の棚田」（有田川町）など多くの棚田があり、紀の川市内でも、五百谷（旧打田町）の棚田など山間部を中心に多くの棚田が残されています。これらの棚田は、毎年、豊かな実りと美しい風景を提供してくれます。

棚田には、米を作るという機能以外にも、水源のかん養、国土の保全、自然環境の保全、良好な景観の形成など多くの機能があります。しかしながら、農家の高齢化が進む中、耕作が放棄され荒れている棚田がたくさんあるた

め、全国的に棚田を守ろうという取り組みが盛んにおこなわれています。

実は、棚田の起源といえるべき棚田跡が紀の川市桃山町元地区にあります。室町時代の一四〇六年、高野山に伝わる「高野山文書」に元地区の棚田について「棚二似タル故二、タナ田ト云」と記述されています。これは、文献上、棚田という言葉が使われた初期の事例とされ、棚田の第一人者である早稲田大学の中山峰広名誉教授の著書『日本の棚田』の冒頭で紹介されています。当時、元地区周辺は荒川 荘という荘園で高野山が支配する地域でした。高野山に残された貴重な文化財の数々は、紀の川流域の棚田が支えてきたともいえ



元地区の棚田跡

るのではないのでしょうか。
現在、この棚田跡は、桃畑などになっていて「棚田」の原形はとどめていません。しかし、これら歴史深い紀の川市の貴重な「宝物」を、私たちがどのように守り活用していくかが大きな課題となっています。



五百谷の棚田



16 本川谷沿いの棚田

鞆^{ともしがら}地区では、中心部を流れる真国^{まくに}川の支流に沿って、所々に小さな棚田^{たなだ}があります。平地の少ない山間部で、米^{こめ}がとれるのを少しでも増やすための工夫です。

これらの地域では古くから棚田が開発され、室町時代の文書^{もんじょ}にその地名が出てきます。同じ頃より、鞆^{ともしがら}地区から高野山へ大量の薪^{しん}炭^{たん}を供給するようになりました。狭い谷^{せま}を縫^ぬうように広がる棚田の開発は薪炭林の開発とつながりがあったのかも知れません。棚田を開発するために伐採^{ばっさい}した木材^{まき}を薪^{まき}として利用したのであれば、農地と森林の調和のとれた開発であったといえます。

これらの棚田は、自然の地形に沿って流れ



鞆・本川谷沿いの棚田



瀬川の蛍（提供：わかやま新報）

る谷や湧き水から水を引いています。しかし、山間地の川は上流で流れる量が少なく、日照りが続くとすぐに水田が干上がってしまうという問題がありました。そこで、流れの

少ない谷をいったん堰き止めてため池を造り、そこから水を引くようにしました。

棚田は米作りを通じて、国土、環境の保全などの役割も果たしています。

大雨が降っても、ダムのように棚田に水が貯められ、時間をかけてゆっくり川へ流れ、洪水を防ぎます。また、棚田に貯められた水の一部は地下へ浸透し、きれいな地下水となって貯蔵され、地元の井戸水として利用されます。

棚田を潤している谷では、水がきれいなので、六月初旬ごろには蛍が飛び交い、週末には遠くから観賞に来る人でにぎわっています。

近年、全国的に棚田を守る活動が盛んになっていますが、私たちの身近な地域に残っているこのような環境を大切にしたいものです。



紀の川市北部



広域図



五年表

西暦

元号

出来事

国内の主な出来事

1156年	平安時代 保元1
1223年頃	貞応2
1240年	仁治1
1290年	正応3
1296年頃	永仁4
1305年頃	嘉元3
1309年	延慶2
1330年頃	1330年頃
1406年	応永13
1413年	応永20
1436年	永享8
1467年	応仁1
1590年	天正18
1626年	寛永3
1642年	寛永19
1644年	正保1
1649年	慶安2
1650年	慶安3
1652年	承応1

- 鞆淵地区にて真国川から水を引くための用水路・大湯が築造され、ホリキリが開通する。
- 荒川荘の水源地に田中荘の佐藤仲清（西行の兄）らが強引に立入り、柴草・薪などを得る。
- 四十八瀬川（穴伏川）からの取水をめぐる、静川荘（名手上・名手下付近）と柿田荘（かづらぎ町）との間で争いが起る。
- 丹生屋村と名手荘との間でかんがい用水をめぐる争いが始まる。
- 安楽川井用水の原型と考えられる大井の存在が確認される。
- 粉河地区の魚谷池の拡張工事が農民の手によって始められる。
- 名手地区の山田池の近くに山田新池が築造される。この頃、名手地区には既に門井という用水路が築造されていた。
- 粉河地区の中後池が農民の手によって築造される。
- 長田地区に存在した多くのため池や寺社などを描いた「紀伊国井上本荘絵図」が制作される。
- 桃山地区の元にあった棚田が高野山に寄進される（棚田についての文献上初期の所見）。
- 安楽川井用水の再興が荒川荘住民等によって請け負われる。
- 魚谷池の池水の利用をめぐる、各利用者の利用権を記したノートが作成され始める。
- 丹生屋村、名手荘間でのかんがい用水争いが近隣村落を交えての大規模な合戦となり、守護代の仲裁により両者が証文を取り交わして和解する。
- 高野山の木食応其によって、安楽川井用水が再興される。
- 安藤忠兵衛によって堤防を築いて段地区に新田を開く。
- 大畑才蔵生まれる。
- 徳川頼宣の命により春日池が築造される。
- 徳川頼宣の命により海神池が築造される。
- 四十八瀬川（穴伏川）からの取水をめぐる静川荘（名手上・名手下付近）と柿田荘（かづらぎ町）のかんがい用水をめぐる争いが再燃する。
- 徳川頼宣の命により桜池が築造される。

- 鎌倉幕府ができ、承久の乱によって鎌倉幕府が後鳥羽上皇を倒す。
- 各地の荘園で「悪党」が活動する。
- 後醍醐天皇によって鎌倉幕府が倒される。
- 室町幕府ができ、南北朝が統一される。
- 応仁の乱が起って京都が焼け野原となる。
- 豊臣秀吉が天下を統一する。
- 徳川家光が江戸幕府三代将軍となり鎖国政策が始まる。
- 長崎に出島が完成する。
- 明暦の大火で江戸中が焼ける。

1667年	寛文7
1696年	元禄9
1700年	元禄13
1704年	宝永1
1707年	宝永4
1708年	宝永5
1709年	宝永6
1710年頃	宝永7
1720年	享保5
	享保年間
1760年	宝暦10
1804年	文化1
1809年	文化6
1835年	天保6
1885年	明治18
1898年	明治31
1911年	明治44
1914年	大正3
1915年	大正4
1917年	大正6
1919年	大正8
1951年	昭和26
1953年	昭和28
1957年	昭和32
1958年	昭和33
1964年	昭和39
1967年	昭和42
1984年	昭和59
2000年	平成12
2005年	平成17
2007年	平成19

- 荒見井用水が完成（現在は安楽川井用水と連結する）。
- 大畑才蔵が紀州藩の役人に取り立てられ、藤崎井用水の築造に着手する。
- 藤崎井用水が完成。
- 大畑才蔵が春日池を視察する。
- 大畑才蔵が小田井用水の築造に着手する。
- 小田井用水第一期工事完成。この工期の中で龍之渡井が造られる。
- 小田井用水第二期工事完成。
- 大畑才蔵、この頃『地方の聞書』を著す。
- 小田井用水第三期工事の完成をみることなく、大畑才蔵没。
- 小田井用水が完成。
- 華岡青洲生まれる。
- 華岡青洲が「通仙散」により乳がん摘出手術に成功。
- （1818年）華岡青洲が自宅で「春林軒」という医学校を開き、全国から入門者が集まる。
- 華岡青洲が私財を投げ打って農民を雇い、垣内池を築造する。
- 華岡青洲没。
- 伊都郡役所に小田井の水利土功会（後の土地改良区）が設置される。
- 桃山町百合地区の桃栽培農家の人々により桃の新品種の改良が重ねられる。
- 坂本文三郎が調月村村長に就任。
- 木積川渡井の改修工事。
- 大畑才蔵を讃える顕彰碑が粉河寺境内に建立される。
- 貴志川地区にトンネル池が完成。
- 龍之渡井の改修工事。
- 小田井土地改良区が成立。
- 貴志川大水害。十津川・紀の川総合開発事業の一環として、山田ダムの建設に着手。
- 山田ダム完成。
- 紀の川用水の水源となる猿ヶ谷ダム（奈良県五條市）が完成。
- 小田頭首工の改修が完了。
- 十津川・紀の川総合開発事業の一環として、紀の川用水の建設に着手。
- 『地方の聞書』を含む大畑家文書が県指定文化財に指定される。
- 紀の川用水が完成。
- 華岡青洲の施設「青洲の里」が完成。春林軒も整備される。
- 那賀町・粉河町・打田町・桃山町・貴志川町の合併により、紀の川市が誕生する。
- 貴志川町神戸地区に平池緑地公園が完成。

● 赤穂浪士事件。

● 徳川吉宗の享保の改革が始まる。

● 異国船の来航が相次ぐ。

● 天保の大飢饉。

● 内閣制度発足。

● 大逆事件。

● 第一次世界大戦参戦。

● シベリア出兵。

● サンフランシスコ平和条約。

● 国連加盟。

● OECD加盟。

参考資料

- ・安藤精一ほか／監修 『江戸時代人づくり風土記30 ふるさとの人と知恵和歌山』 社団法人農山漁村文化協会
- ・打田町史編さん委員会／編 『打田町史』 打田町
- ・海老澤衷 『紀伊国鞆洲莊地域総合調査 本編』 早稲田大学大学院海老澤衷ゼミ
- ・大畑才蔵翁彰功之碑パンフレット 和歌山県
- ・大畑才蔵全集編さん委員会／編 『大畑才蔵』 橋本市
- ・海津一朗／編著 『きのくに歴史発見』 白馬社
- ・貴志川町 『広報きし川 平成14年3月号』 貴志川町
- ・貴志川町史編集委員会／編 『貴志川町史』 貴志川町
- ・『紀の川工事誌』 近畿農政局紀の川用水農業水利事業所
- ・紀の川農業水利史編集委員会／編 『紀の川農業水利史』 和歌山県
- ・紀の川水の歴史街道編集委員会／編 『紀の川―水の歴史街道― 建設省近畿地方建設局和歌山工事事務所
- ・近畿農政局十津川・紀の川事業誌編集委員会／編 『十津川・紀の川事業誌』 近畿農政局十津川紀の川農業水利事業所
- ・粉河中学校社会科副読本編集委員／編 『粉河町のなりたち 歴史をうごかした人びと』 粉河町教育委員会
- ・粉河町史専門委員会／編 『粉河町史』 粉河町
- ・『国営造成土地改良施設整備事業 紀の川地区完工記念誌 明日につなぐ』 近畿農政局南近畿土地改良調査管理事務所
- ・杉本徳一郎・信定武臣 『池田村誌』 池田村
- ・地球環境・人間生活にかかわる農業及び森林の多面的な機能の評価について(答申)
- ・中島峰広 『日本の棚田』 古今書院
- ・那賀町史編集委員会／編 『那賀町史』 那賀町
- ・平地緑地公園パンフレット 紀の川市
- ・的場鹿五郎 『紀の川分水物語 わが田に水を引く』 紀の川分水物語出版委員会
- ・藪内虎彦／編 『桃山町史』 桃山町
- ・山陰加春夫／編 『きのくに荘園の世界 上巻・下巻』 清文堂出版
- ・吉野川分水史編集委員会／編 『吉野川分水史』 奈良県
- ・林野庁HP 森の有する多面的機能 (<http://www.rinyamaf.go.jp/seisaku/sesakusyoukai/famenteki/famentekitop.html>)
- ・和歌山県教育庁生涯学習局文化遺産課 紀の川流域荘園詳細分布調査委員会／編 『紀伊国名手荘・静川荘地域調査』 和歌山県教育委員会
- ・和歌山県立博物館／編 『歴史のなかのきともぶち』 鞆洲八幡と鞆洲荘』 和歌山県立博物館

きのかわ

—人と水の物語—

発行

平成 22 年 3 月

農業用水水源地域保全対策事業

制作委員

大浦統夫 田津原一博

高木徳郎 直川暢浩

信定俊彦 藤範信介 渡辺勝

制作

紀の川市農林商工部農地課

紀の川市教育委員会

印刷・製本

株式会社 日本出版



学 年		組		番 号		氏 名	
--------	--	---	--	--------	--	--------	--